

契丹陶磁の「周縁性」に関する検討（2） －唐代の三彩窯との比較を通して－

町田 吉隆*

Examining on the Border Character of the Kitai Pottery in China (2)
: To compare with the Kilns which to produce Tricoloured Pottery in the Tang Dynasty

Yoshitaka MACHIDA*

ABSTRACT

We are able to find out an archaic style in the Kitai (契丹) Pottery. These styles are similar to the pottery in the Tang (唐) Dynasty rather than the pottery in the Northern Song (北宋) Dynasty of the same era (A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. This paper will survey one of the characteristics of the Kitai pottery. It seems reasonable to assume that the style of the Kitai pottery in the Liao Dynasty (遼朝) is not archaic but combined. We can see the combined feature to compare with the kilns which to produce the tri-coloured Pottery (三彩) in the Tang (唐) Dynasty.

Keywords : pottery, Kitai (契丹), Liao Dynasty (遼朝), China, history

1. はじめに

10世紀初めから12世紀初めにかけて華北の一部を含む北東アジアから内陸アジアにまたがる領域を支配した契丹国（遼朝，以下，契丹国と表記）の陶磁器のうち，その領域内で生産された陶磁器を，ここでは「契丹陶磁」と規定する。

契丹国の陶磁器には古風な特徴があることが指摘されている。それは10世紀から12世紀にかけて生産されたものであるにもかかわらず，むしろ唐代の陶磁器に類似しており，同時代の北宋時代の陶磁器とは異なる様式であることを意味する。そして，それはしばしば中心文化が地方へと波及する時差により遅れることを意味する「周縁性」として説明されてきた[1][2]。

この論考では前稿を受けて，「周縁性」の由来の一つとされる唐代の陶磁器窯との関係を考察する。対象とするのは三彩を含む低火度鉛釉陶磁器を生産していた陶磁器窯である。一つは三彩が唐代を代表する陶磁器とみなされると共に，契丹陶磁の典型として評価されてきたこと。二つめには，実際に三彩を焼成していたことが確認される陶磁器窯は唐代，契丹国時代ともに，その数は多くはないこと。つまり，唐代の陶磁器生産と契丹陶磁の生産，および両者の陶磁器窯を継承関係を探る上で，よい対象となると思われるからである。契丹陶磁の鉛釉陶磁器としては，このほかに渤海系の瓦と長瓶（牛腿瓶）も

*一般科教授

含まれるが，ここでは考察の対象には加えなかった。

2. 契丹陶磁の特色

一般に契丹国の陶磁器と呼ばれるものには，契丹国の陶磁器窯で生産されたもの，北宋や西夏などからの輸入陶磁器，そのどちらとも判別がつかないもの，三つのグループに分けることができる。本稿で取り上げる低火度鉛釉陶磁器は，その何れにも含まれる。筆者は先に一番目のグループを「契丹陶磁」として分類した。いわゆる「遼三彩」を含む低火度鉛釉陶磁器は，ここに含まれるが，実際には輸入陶磁器であるところの「宋三彩」も含まれるし，三番目のグループ，判別のつかない陶磁器も存在する。

このように個々の陶磁器の生産地を特定するには微妙な問題も存在するが，まず，先に契丹国の境域内で低火度鉛釉陶磁器を焼成していた陶磁器窯について確認しておく必要があるだろう。

現在，契丹国の陶磁器窯として確認されているものについて，整理してみよう[3]。

①遼上京窯址

内蒙古自治区赤峰市巴林左旗林東鎮の南側約1.5kmに残る遼上京城址内で確認されている。城址の北部は「皇城」域と想定されているが，その西部に位置する。窯址は発掘された後，原状復帰されたということであるが，窯壁などは当初から残っており，地表面から窺える形態は直径10m前後の楕円形窯1基である。「皇城」域西側の「乾徳門」と

想定される付近には版築を施した城壁が残存しているが、ここにも窯址があったとされる。ただし、現状からはその形態は不明であった。スリップを施さない白磁および鉄釉を施した黒釉磁、低火度焼成鉛釉陶器である緑釉の瓶類を焼成していたことが確認されている。この活動時期については、10世紀初頭建国期の短期間だけという説、建国期から契丹国の衰亡期までという説、11世紀の後期に開窯したという説、契丹国の滅亡後、金朝治下で活動していたという諸説がある。

②遼上京の南山窯址

窯址は遼上京遺址内の南西部に残る南塔がある丘の北西に位置している。林東鎮の南西側約1kmにあたる。周辺はトウモロコシ、ソバなどの畑になっており、窯址は原形を留めていない。現地の畑の地表面上には、陶磁器片やトチンなど窯具が見られ、窯址であることが確認できる。白土をスリップした白磁や白磁、黄褐釉に緑釉を施した「二彩」などを焼成していたことが確認される。残存遺物の量から見て、活動期間は短いとされる。報告書類に記載は少ないが、中期の11世紀前半頃から後半にかけて焼成していたと理解されているようである。

③林東白音戈勒（バインゴル）窯

赤峰市巴林左旗の林東鎮の西約2.5kmに位置している。鉄釉の甕類や小壺などを焼成していた。規模は大きく、10世紀から活動していた日常雑器を生産していた磁窯のようである。

④赤峰缸瓦窯

赤峰市の中心部から西へ約70kmの松山区缸瓦窯村に遺址がある。現在までに発掘調査された窯炉が20を超える東西1.5km、南北1kmの範囲に広がる広大な磁窯址である。現地には東西に烏台図河が流れ、南には馬家南山が迫り、山腹に龍窯（登り窯）の窯炉址が確認できた。窯道具以外にも、文様を施す際に用いる模範（型）も多く見つまっている。白磁が数量としては最も多く、黄釉、緑釉の陶磁器や三彩及び磁州窯に多い白地鉄絵や白地線彫りなど品種は多彩である。鉄釉を用いる黒褐色釉磁器は鶏腿瓶と呼ばれる長壺以外は数が少ない。契丹国を代表する器形である鶏冠壺や鳳首瓶、海棠花形の長円盤などを焼成していた。また瑠璃瓦の焼成も行っていたことが判明している。前期にあたる10世紀には成立していたと考えられるこの磁窯は元代まで活動を続けていたと思われるが、その盛期は三彩の生産が活発であった後期11世紀後半と考えられる。

⑤遼陽江官屯窯

遼寧省遼陽市の東約30kmに位置する。太子河のほとりにあるこの陶磁器窯は白磁を主に焼成していたとのことである。その規模は大きい。生産していた器種は内蒙古自治区内の磁窯に同じであるが、窯

具としての匣鉢を用いず、トチンを器物の上下に夾んで、窯入れしていた点が異なっていたとされる。11世紀末の契丹国の晩期に起こり、金朝治下でも焼成を続けていたとされる。

⑥北京龍泉務窯

現在の北京市は10世紀の前半に契丹国の「南京」が置かれた。11世紀の後半には、人口も約30万人を有する契丹国最大の都市になっていた。龍泉務窯の窯址は現在の北京市南西郊外にあり、契丹国の陶磁器窯では唯一、近年になって本格的な発掘調査が行われた陶磁器窯である。河北の定窯に類似した硬質な白釉磁器と、同じく磁州窯風の白化粧土を施した白地鉄釉の陶磁器、緑釉と茶褐色の低火度鉛釉陶磁器を焼成していたことが判明している。

活動時期は、10世紀後半から11世紀半ばまでの前期と、11世紀半ばから12世紀初めまでの後期、12世紀から13世紀までの金朝が支配していた時期に分けることができると言う。

⑦山西渾源界莊窯

山西省大同市は契丹国の「西京」にあたるが、その南東約30kmに位置する窯址である。白化粧土を施した胎土に青磁釉をかける特異な陶磁器を生産しており、彭善国氏は高麗青磁の「象嵌」技法と比較している。白地線彫り、白地鉄絵や鉄釉線彫りなど磁州窯系の陶磁器が出土していない点においても、契丹国時代の陶磁器窯としては特異な陶磁器窯であると言えよう。

以上、契丹国時代の陶磁器窯を概観する中で、すぐに気づくことは契丹陶磁を象徴する低火度鉛釉陶磁器の黄釉、緑釉、「遼三彩」を生産していた陶磁器窯は、④赤峰缸瓦窯と⑥北京龍泉務窯しかないということである。今後の調査により低火度鉛釉陶磁器を焼成していた陶磁器窯が発見される可能性もあるが、いわゆる「遼三彩」を含む契丹陶磁はこの二箇所の陶磁器窯で生産されていたとみなされる。

3. 契丹国の陶磁器生産と徙民政策

低火度鉛釉陶磁器の生産が赤峰缸瓦窯と北京龍泉務窯を含む契丹国の陶磁器窯で始まったのは、契丹国の建国後10世紀に入ってから後のことである。つまり、その生産技術は契丹国の外部から移入されたものである。先述したように、その中で、深緑釉の硬質陶磁器は、10世紀の初めに契丹国の攻撃により滅亡した渤海国から移入された。「遼三彩」を含む低火度鉛釉陶磁器についても、「渤海三彩」との関係も考えられるが、「渤海三彩」については生産地も不明であり、その関係を考察することは難しい。契丹国の建国後に移入された技術とすれば、華北もしくは中原地方の陶磁器窯から移入されたと考えられる。華北に相当する現在の河北省、河南省、

山西省や中原地方の陝西省には唐代から宋代にかけて数多くの陶磁器窯が存在した。契丹国の陶磁器窯はどの陶磁器窯の影響を受けたのであろうか。

当然、そこには技術や陶磁器だけでなく、陶工ら工人の移動がともなったはずである。契丹はその建国以前から、徙民政策を採用して、華北から住民を自らの領域に移住させていた〔4〕〔5〕。

太祖の耶律阿保機は遙輦氏に代わり、迭刺部を率いて、シラムレン河に沿った東京臨潢府に決起して、都とし、渤海を926年に滅ぼして、州県城の基になる城邑103箇所を獲得した。後を継いだ2代目の太宗・耶律堯骨は現在の遼寧省南西部、河北省北部、山西省東北部にまたがる、いわゆる「燕雲十六州」、正しくは燕薊十六州を後晋建国支援の見返りに獲得した（a）。

（a）太祖以迭刺部之衆代遙輦氏，起臨潢，建皇都，東併渤海，得城邑之居百有三。太宗立晋，有幽，涿，檀，薊，順，營，平，蔚，朔，雲，應，新，媯，儒，武，襄十六州，於是割古幽，并，營之境而跨有之。

『遼史』卷37・地理志

また、太祖が即位する以前、つまり9世紀末から国境を接する河北の地域からは漢人が多く移住していた（b）。

（b）初，唐末，藩鎮驕橫，互相併吞隣藩。燕人軍士多亡歸契丹。契丹日益強大。

『契丹国志』卷1・太祖紀

実際、建国当初においてもこれらの漢人に対しては、建設した都城に居住させるに当たって、結婚を奨め、開墾や技芸を奨励して、生活を可能にしたため、逃亡する者も少なかったとされる（c）。

（c）乃請樹城郭，分市里，以居漢人之降者。又為定配偶，教墾藝，以生養之。以故逃亡者少。

『遼史』卷74・韓延徽伝

これら「技芸」を持つ人々の中に、陶工の名称は含まれていないが、含まれていた可能性は検討に値しよう。問題は彼らがどこから連れて来られたのか、という点である。

10世紀前半に獲得した先述の「燕雲十六州」、現在の遼寧省南西部、河北省北部、山西省東北部が候補地となるが、たとえば、白磁で有名な「定窯」があった定州や、北宋代に白化粧土を施した白地線彫りや白地鉄絵などの陶磁器を産した磁州は、この時期には契丹国の領域に含まれてはいない。定州、磁州を含む華北の陶磁器生産地が契丹国によって一時的に占領されるのが10世紀半ばの太宗・耶律堯骨による後晋攻略時期であった。

943年に後晋に攻め込んだ契丹国は、白磁の産地であった定州を含む現在の河北省各地を占領した（d）。翌年には同じく白磁を焼成していた邢州の

東隣の貝州を取った際に、住民を北方の契丹国へ移住させている（e）。一方で当然のことながら戦争の過程で、戦場になった地域では略奪、破壊が続いた。邢州や宋代10世紀後半以降、華北地方最大の陶磁器の産地となる磁州も例外ではなかった（f）。

947年には後晋の首都・汴京、現在の河南省開封市を攻略、占領し、多くの器物と共に、後晋に仕えていた職人集団を契丹国の都である上京（現在の内蒙古自治区巴林左旗）に連れ帰った（g）。

（d）（会同六年）十二月丁未，如南京，議伐晋。命趙延壽，趙延昭，安端，解里等由滄，恒，易，定分道而進，大軍繼之。

『遼史』卷4・太宗本紀

（e）（会同七年・三月）壬午，留趙延昭守貝州，徙所俘戸于内地。

『遼史』卷4・太宗本紀

（f）（会同八年）春正月，庚子，分兵攻邢，洺，磁三州，殺掠殆盡。

『遼史』卷4・太宗本紀

（g）（大同元年・三月）壬寅，晋諸司僚吏，嬪御，宦寺，方技，百工，凶籍，曆象，石經，銅人，明堂刻漏，太常樂譜，諸宮縣，鹵簿，法物及鎧仗，悉送上京。

『遼史』卷4・太宗本紀

このような状況下において、他の技術と共に契丹国の陶磁器窯に低火度鉛釉陶磁器の技術が導入されたとすれば、それは10世紀半ば以降と予想される。

より具体的には、どこの陶磁器窯の技術が導入されたのであろうか。

契丹国が侵攻した地域は現在の河北省、山西省、河南省の北部に相当する。華北の東半を占領したことになるが、947年に太宗・耶律堯骨が占領地で病没すると、現在の山西省中部にあたる地域に傀儡国家とも言うべき北漢を置いて、燕薊十六州以北へ戻ってしまう。つまり、山西省を除けば、華北の陶磁器窯が立地していた地域を契丹国が長期間にわたり、支配することはなかった。

また、この時期に侵攻した現在の河北省、山西省、河南省には、定窯、磁州窯など10世紀後半以降、北宋、金、元代と、中国陶磁史に名を残す陶磁器窯が生まれることになるが、10世紀以前に低火度鉛釉陶磁器、就中、「三彩」を焼成していたことが確認されている陶磁器窯は多くはない。陝西省銅川市の黄堡窯、陝西省西安市の醴泉坊窯、河北省邢台市の邢窯、河南省鞏義市の黄冶窯などである。

現在の陝西省には契丹国時代を通して、その支配は及ばなかったので除外すると、検討を要するのは、華北の中でも、河北省、河南省の陶磁器窯ということになる。

4. 河北の邢州窯

邢州窯は現在の河北省邢台市にあった陶磁器窯群であり、省の南部、さらに南約 50kmには磁州窯の陶磁器窯群がある邯鄲市がある。古来、唐代白磁の産地として名高いが、近年の調査の結果、金代 13世紀ころまで焼成していた陶磁器窯も見い出されており、広く言えば磁州窯系の陶磁器窯と言える〔6〕。

邢台市の臨城県からはおおよそ 17 箇所の陶磁器窯が確認されているが、そのうちの 4 箇所は唐代の陶磁器窯である。ここでは白化粧土を施した上に釉薬をかける白磁が出土しているが、色のついた低火度鉛釉陶磁器は見られない。ただし、騎馬俑や扁壺など、唐三彩と共通する器形も見られる。窯炉は饅頭窯であるが、火膛（焚き口）の下には、草木灰が大量に堆積しており、燃料として柴薪を用いていたことが明らかになっている。大きな碗や盤（大皿）を重ねて焼成する際には、三角形のハマ（陶磁器を焼成する際に、窯の中で融着してしまわないように器物の間に挟む窯道具）を用いている。

臨城県および南の内丘県では、28 箇所の陶磁器窯の遺構が確認されている。報告によれば、青磁、白化粧土を施した白磁、定窯風の白化粧土を施さない白磁、鉄釉を用いた黒褐色の陶磁器、そして、契丹陶磁にも見られる黄釉磁器と、低火度鉛釉陶磁器の三彩などの陶磁器が作られていた。

試掘された遺構は 2 箇所ある。一つは李陽河の東南岸に位置する内丘県の市域西部一帯で、南北 1.2km、東西 700m に及ぶ範囲で、西関遺址と呼ばれる。もう一箇所は臨城県の西北約 7.5km の祁村の東南部に広がる約 6 万 km^2 の地表遺物が確認されている祁村遺址である。

遺構は第 1 期から第 5 期に区分されると言う。

第 1 期は内丘県西関遺址の灰坑を含む出土層で、青磁、白化粧土を掛けた白磁が多く、次いで定窯風の良質な白磁、ごく少数の鉄釉の黄色や黒色の陶磁器が見られる。碗や罐などの器形から隋代に相当するとみなされる。

第 2 期は内丘県西関遺址の第 2 層に相当し、白化粧土を掛けた白磁以外に、黄色釉薬や黒色釉薬など鉄分を含む低火度鉛釉陶磁器が比較的多く含まれる。また三彩の大鉢と胡人をかたどった陶俑が見られ、唐代前期 7 世紀初めから 8 世紀に比定されている。

第 3 期は内丘県の一部と臨城県の祁村遺址に見られる。白化粧を掛けた白磁が多く、低火度鉛釉陶磁器としては、黒釉や黄釉が見られる。「開元通宝」や「乾元通宝」が伴出することから、唐代中期 7 世紀末から 9 世紀の初めの遺構と考えられている。

第 4 期は臨城県の祁村遺址のみに見られ、唐代末期 9 世紀から 10 世紀の初めに相当すると考えられ

る。鉄釉を用いた黒色陶磁器が多く作られているところに特色がある。また支釘（トチン）に三角形に加え、四角形が現れている点にも相違がある。

第 5 期は第 4 期を継承しており、白磁、黒陶磁が中心であり、陶枕や動物や人形のミニチュアも見られる。10 世紀の半ば、五代に相当する遺構と考えられている。

邢州窯を契丹陶磁との関係から考察するならば、まず、生産していた器形に共通点がある。扁壺、方形の陶枕、動物や人形などのミニチュアなどは契丹陶磁（赤峰缸瓦窯や北京龍泉務窯）などに特徴的な陶磁器であり、唐代末期から五代にかけて邢州窯で作られていたこれらの器形は、そのまま契丹陶磁に継承された可能性がある。

また三角支釘は時期により、その形状が変化するが、第 2 期から第 4 期にかけて広く用いられている。この窯具は第 5 期になると割合が減り、その形状も円形の薄片になってしまうと言う。筆者は現地での見学（2008 年、2009 年、2011 年）の際に、赤峰缸瓦窯で作られたとされる陶磁器を実見する機会を得たが、碗、盤などには器の内面（見込の部分）に三箇所の釘目痕があり、匣鉢ではなく、三角支釘を使用していたであろうと推測している。つまり、赤峰缸瓦窯は邢州窯で 9 世紀まで用いられていた技術を使用していたと考えられる。

同様に低火度鉛釉陶磁器としての黄釉や三彩の陶磁器は第 2 期、唐代前期を最盛期として、第 3 期、7 世紀末から 9 世紀にかけては数量も器形の種類も減少している。邢州窯の陶磁器生産量が大きかったのは、この第 3 期と考えられており、以降は白磁と鉄釉を中心とする磁州窯系陶磁器窯の魁となった。

5. 河南の鞏義窯

河南省鞏義市は洛陽から東流する洛河の南岸に位置している。洛陽市からは東に約 50km、五代、宋代に首都となった汴京、現在の開封市からは西へ約 100km である。この地域を契丹国が支配下に置いたのは、太宗が後晋を攻めた 10 世紀半ばだけであり、現在の河北省に存在した陶磁器窯、定州窯、磁州窯、邢州窯などに比べ、その関係性は低いように思われる。ただし、前述したように、この侵攻の際には、各種の工人を含む捕虜が契丹国に連れ去られ、その後、契丹国の各州県に居住させられており、契丹陶磁における低火度鉛釉陶磁器の源流を考える上で考慮する必要がある。

鞏義市黄冶にある陶磁器窯址群では、唐代に比定される窯炉が 10 基、調査されている〔7〕。それらは皆、饅頭窯である。工房址も 5 箇所で発掘調査されている。これらの遺構や土坑（ピット）から出土した陶磁器の器形は、碗、盆、杯、鉢、瓶などの生

活用品が数量としては多く、また白釉陶磁器、黒釉陶磁器が圧倒的に多く、黄色釉や黒色釉の陶磁器がこれに次ぎ、数量としては三彩は少ないと言う。

遺構の年代区分は大きく4期に分かれると言う。

第1期は堆積層も薄く、また出土した遺物も少ない。6世紀の北方白磁として、日本では知られている青みを帯びた白釉の四耳壺などが見られ、7世紀初めまでの隋代の陶磁器と考えられている。

第2期は白釉陶磁器と鉄釉を用いた黒色陶磁器が多い。器形の種類は多いが、胎土や釉薬の状態は一定の品質を保っており、技術的に成熟していると言う。唐代前期7世紀末までが、この時期に該当するとされる。

第3期は白釉陶磁器にすぐれた遺物が多く、邢州窯や定窯のそれに匹敵するという。ただし、白釉陶磁器よりも数量としては三彩が多く、鉄釉の陶磁器の数は減少している。白釉陶磁器にコバルト釉の絵具で描く白釉藍彩が現れることも注目される要素である。この時期が鞏義黄冶窯の最盛期であり、それは唐代中期の7世紀末から9世紀半ばと比定されている。

第4期は精巧な白釉磁器と三彩が減り、相対的に日用の陶磁器が増加する。注目されるのは、白釉藍彩、絞胎の陶枕、鮮やかな発色の黄釉陶磁器の碗、皿が見られること、および動物、人形など玩具と思われるミニチュアが多く生産されたことであろう。唐代晩期9世紀後半から10世紀初めの時期と想定されている。

唐代に三彩を焼成していた陶磁器窯としては、陝西省銅川市の黄堡窯、同じく現在の西安市郊外にあった長安醴泉坊の唐三彩窯があるが、銅川黄堡窯では早期から匣鉢を用いていたのに対し、長安醴泉坊と鞏義黄冶窯では三角支釘が主流で、匣鉢は鞏義黄冶窯では第4期になって現れる。邢州窯もやはり三角支釘を用いる。ただし、鞏義黄冶窯のそれには環状の円周上に3点突起を持つタイプがあるが、邢州窯では三角形や円盤上に3点突起を持つもの、三本足のヒトデ形のタイプしかない。

鞏義黄冶窯は最も詳細な調査報告がある唐三彩窯であるが、契丹陶磁との関連で言えば、最盛期の唐三彩よりも、白釉藍彩（契丹陶磁では白釉緑彩が多い）、陶枕やミニチュア・玩具、鮮やかな黄釉陶磁器などにおいて、晩唐期の様相との類似点が多いように思われる。

6. 窯業技術伝播の問題点

契丹国の陶磁器が、唐代の陶磁器の影響を受けていることは多くの先学が指摘してきたことである。特に「遼三彩」が唐三彩の影響を受けていることは言を俟たないであろう。

ただし、両者の関係は何に直接的な影響を受けて、いつから、どのように変化したのかについては、わからない点が多い。

黒田源次氏は「これらの調査によっていえることは、遼代の陶磁の窯はいわゆる北方系に属する丸窯焼成であって、まったくその影響を華北地方からうけていることである。しかもその系統には定窯・磁州窯系と三彩系（唐三彩の系統）、それに瑠璃瓦系がある。また別に遼陽の缸官屯窯・撫順窯があって、これは民窯として、遼・金時代と後世にまで続いている。」と総括している〔8〕。

本稿では、このうちの低火度鉛釉陶磁器について検証してきたわけであるが、契丹国の国内で、三彩を含む低火度鉛釉陶磁器を焼成していたと考えられる陶磁器窯は前述のように内モンゴル自治区東部の赤峰市の缸瓦窯と北京市の龍泉務窯の二箇所である。唐代に唐三彩を焼成していたことがある、その最も近くの陶磁器窯は河北省の邢州窯であるが、ここでは唐代後期、五代にあたる9世紀から10世紀にかけては、唐三彩を含む低火度鉛釉陶磁器は生産していなかった。また10世紀半ばに契丹国が侵攻して、工人を移住させた河南省においても、8世紀に盛んに三彩を焼成していた鞏義黄冶窯は、9世紀にはやはり三彩は焼成しなくなってしまう。

彭善国氏は、「遼三彩」は11世紀の半ばに現れるが、それは厚葬の禁令と関係があると考えておられる〔9〕。つまり、白釉緑彩などが先行してあったと考えるわけであるが、「遼三彩」の誕生を11世紀半ばと考える場合、首肯できる考えであろう。つまり、契丹陶磁の「遼三彩」の誕生には、直接的に影響を与えた陶磁器窯は存在せず、間接的な影響は排除しないものの独自に発生したことになる。彭善国氏は白釉緑彩の源流について、山東省淄博市の磁村窯に比定しているが、類似した技法が存在したという以外には、特に根拠は示されていない。

仮に工人が集団で移住させられたことを想定した場合、釉薬の使用方法はもちろん、窯具や窯炉の作成や使用、生産する器形など「生産の形態」というセットの形で、契丹陶磁に移入されたであろう。釉薬の組み合わせ、装飾の技法などは時代の様式によっても、また支配者や市場の需要によっても変容するが、「生産の形態」というセットの形には大きな変化はなかったと考えられる。

「生産の形態」という視点に立つならば、三彩を含む低火度鉛釉陶磁器を生産したことがあり、饅頭形の窯炉を用い、窯具としては三角支釘を匣鉢に先行して使用していた邢州窯と黄冶窯は10世紀半ばに徙民が行われたことも含め、契丹陶磁の形成に影響した可能性が高い陶磁器窯であったとみなされよう。

特に唐代晩期、五代の9世紀から10世紀前半に、黄釉陶磁器を中心に焼成し、動物や人形のミニチュアや陶枕などを作っていた鞏義黄冶窯は、契丹陶磁に特徴的な生産の形態に類似する点が多く、赤峰缸瓦窯および北京龍泉務窯との関係が注目される。

また北宋から金代、10-12世紀に現在の山西省内に位置する陶磁器窯では、伝世品や表面採集を中心とした調査報告によって低火度鉛釉陶磁器を生産していたことがわかっている。山西省の北部は早い段階で契丹国支配下に入っており、今後の本格的な考古学的調査によっては、山西省の陶磁器窯について契丹陶磁における位置づけを検討する必要があるかもしれない。

7. むすびにかえて

契丹陶磁と唐代の陶磁器の関係については、「周縁性」という視点から、契丹国の後進性、あるいは、唐文化への憧憬という形で語られてきたが、両者の具体的な継承関係については不明な点がなお多い。

ここでは、近年、調査報告が公刊された唐代の陶磁器窯、河北省邢台市の邢州窯と河南省鞏義市の黄冶窯を例に考察を試みた。契丹国の徙民政策による工人集団の移動の痕跡は、焼成に際して用いる三角支釘(トチン)の形態と使用方法に見い出される。

ただし、契丹国国内で契丹陶磁を焼成していたと思われる赤峰缸瓦窯と北京龍泉務窯と河北、河南両省の唐代陶磁器窯の生産活動時期は直接にはつながらず、空白期間を挟むように思われることをはじめとして、その関係には、なお少なくない問題が存在する。

また陶磁器そのものについても、契丹陶磁と唐代の陶磁器、双方について「生産の形態」—窯具や窯炉の作成など生産に用いた技法、商品としての陶磁器の生産と流通、それにとともなう器形など様式の変化—をより詳細に比較・考察することが必要である。

それ以外の課題についても例を二つあげておく。

その一つは宋代から金代、10世紀から12世紀にかけて華北で生産された「宋三彩」との関係である。

「宋三彩」と唐三彩との継承関係も不分明な点が多く、その生産時期から考えれば、やはり別個に形成された生産の技法と言える。「宋三彩」を焼成していた陶磁器窯としては、河南省禹県や魯山県の段店窯があり、また鞏義黄冶窯の近く、鞏義市南西の芝田鎮にも陶磁器窯があったことが判明している。

「宋三彩」は金代12世紀に至るまで焼成されており、また器形、装飾の両面において、契丹陶磁の「遼三彩」とは異なっている。唐三彩とは時期的に断絶して現れた両者がどのように関係していたのか、現時点では必ずしも明確ではなく、器形、装飾

の両面から考えれば、契丹陶磁は生産された時期が近い「宋三彩」よりも、むしろ唐三彩に近い要素を持っていたという点を、どのように考えるべきか。

もう一つは焼成燃料の問題である。華北の陶磁器窯では10世紀を境界として、窯炉の燃料が柴薪から石炭へと転換している。陝西省銅川市の黄堡窯では、唐代は柴薪を、五代を挟み、宋代には石炭燃料へと転換している。契丹国の陶磁器窯では柴薪燃料と石炭燃料が同時期に用いられていたと、筆者は現時点では考えているが^[10]、低火度鉛釉陶磁器を焼成した場合、いつの時点においてか、石炭燃料に転じたであろうと思われる。その時期はいつなのか。

各陶磁器窯の調査を待つと共に、今後の課題としたい。

参考文献

- [1] 町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討—唾壺と陶枕を例に」神戸高専紀要(48), pp.161-166, 2010, .
- [2] 小川裕充「遼・西夏の絵画 総論」『世界美術大全集 東洋編 5 五代・北宋・遼・西夏』p.125, 1998.
- [3] 町田吉隆「契丹国(遼朝)の陶磁窯とその特色」町田吉隆編『契丹陶磁—遼代陶磁の資料と研究—』朋友書店, pp.10-11, 2008.
- [4] 田村實造「徙民政策と州縣制の成立」『中国征服王朝の研究 上』東洋史研究会, pp. 273-313, 1964.
- [5] 島田正郎「漢人の遷徙と州縣制の成立」, 「移住漢人の経済生活」『遼代社会史研究』巖南堂書店, pp.213-267, 1978.
- [6] 邢台市文物管理所, 臨城県文物保管所編『邢窯遺址研究』科学出版社, pp.60-112, 2007.
- [7] 河南省文物考古研究所ほか編『鞏義黄冶唐三彩』大象出版社, 2002. (翻訳 奈良文化財研究所『鞏義黄冶唐三彩』奈良文化財研究所史料 61冊, 2003.)
河南省文物考古研究所ほか編『黄冶窯考古新発見』科学出版社, 2005. (翻訳 奈良文化財研究所『黄冶唐三彩窯の考古新発見』奈良文化財研究所史料 73冊, 2006.)
- [8] 黒田源次, 杉村勇造『遼の陶磁』平凡社, p.1, および p.7, 1958.
- [9] 彭善国『遼代陶磁の考古学的研究』吉林大学出版社, p.67, 2003.
- [10] 町田吉隆「磚瓦焼成燃料に関する一考察—元代大都の「蓑城」をめぐる—」立命館東洋史學(25), pp.1-28, 2002.